



Title	移動動詞の意味論
Author(s)	中田, 一志
Citation	大阪外国語大学論集. 1996, 14, p. 37-53
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79686
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

移動動詞の意味論

中 田 一 志

The Semantics of Movement Verbs in Japanese

NAKATA Hitoshi

This paper examines movement verbs in Japanese that display their goal, based on the Situation Semantics, advocated by Barwise and Perry(1983). To characterize the meaning of these verbs, the interpretation of their time-adverbial phrase and the feature of their goal should be required. These requirements will be satisfied by observing and describing the situation where proper states of affairs stand before/after movement and its circumstance.

The main verbs discussed here are *tsuku*(to arrive), *shuppatsu-suru*(to depart), *modoru*(to return), *kaeru*(to go home), *kuru*(to come) and *iku*(to go).

The main findings of this paper are the following:

1. Movement verbs that display both their source and goal have distinctive features on their goal.
2. The features are of three types: goal's attribute, situation after movement and its circumstance.

1 導 入

日本語の移動動詞には、「去る」のように専ら起点をあらわす動詞⁽¹⁾、「着く」のように専ら着点をあらわす動詞や「出発する」「帰る」「戻る」「行く」「来る」のように起点・着点のいずれもあらわせる動詞が存在する。その中で専ら起点をあらわす動詞は離脱をあらわし、着点をあらわせる動詞と比べると移動性が劣るように思われるので、純粹に移動をあらわす動詞は着点をあらわすことができる動詞であるとする。その中には移動主体と着点の関係に全く制限がな

いものとなんらかの制限があるものがある。

(1)のように「着く」は着点はどこでもよいのに対して、(2)のように「出発する」は着点が移動主体または話し手の本拠地の場合適しない。(2)

- (1) a. 太郎はホノルルに着いた。
 b. 太郎は(自分の)大学に着いた。
 c. 太郎は(自分の)家に着いた。
 d. 太郎は僕の家に着いた。
- (2) a. 太郎はホノルルに出発した。
 b. *太郎は(自分の)大学に出発した。
 c. *太郎は(自分の)家に出発した。
 d. ??太郎は僕の家に出発した。

「帰る」「戻る」も同様に移動主体と着点の関係になんらかの制約が存在する。(3a)(3b)は(3c)で「家」が移動主体の本拠地であるようにそれぞれ「ホノルル」「大学」が本拠地であることが「帰る」によって要求される。また、(3d)は着点が移動主体の一時的な起点であることを許容しないため非文となる。それに対して、「戻る」は(4d)のようにもといた場所(一時的なものを含む起点)への移動(帰還)に用いることができる。(4a)(4b)(4c)もそのような解釈で文が成立する。

- (3) a. 太郎はホノルルに帰った。
 b. 太郎は大学に帰った。
 c. 太郎は家に帰った。
 d. *太郎は出発点に帰った。
- (4) a. 太郎はホノルルに戻った。
 b. 太郎は大学に戻った。
 c. 太郎は家に戻った。
 d. 太郎は出発点に戻った。

次に、このような移動主体と着点の関係以外に、着点での話し手の存在が関与する場合がある。(5)は移動の着点「ここ」に話し手が存在するので「来る」が選ばれ、(6)は移動主体の到達時に話し手が不在でなければならないことを要求する。

- (5) 太郎はここに {来た/*行った}。
 (6) 太郎は僕の家に行った。

さらに、時間副詞句に関して、「出発する」のように出発を意味する動詞は出発時を、「着く」「戻る」「来る」のように到着を意味する動詞は到達時をあらわすが、「帰る」「行く」のように両者の解釈ができる動詞も存在する。

- (7) 太郎は午後6時にホノルルに出発した。(出発時)

- (8) 太郎は午後6時にホノルルに着いた。(到達時)
 (9) 太郎は午後6時に家に戻った。(到達時)
 (10) 太郎は午後6時に僕の家に来た。(到達時)
 (11) 太郎は午後6時に家に帰った。(出発時/到達時)
 (12) 太郎は午後6時に僕の家に行ったらしい。(出発時/到達時)

以上のことを踏まえると、移動動詞の語彙的な意味を特徴づけるためには着点の性質を記述するだけでなく、時点の解釈を必要十分に説明できなければならないことが分かる。「出発する」は着点が移動主体あるいは話し手の本拠地以外であり、時点は常に出発時をあらわし、「着く」は着点に制限がなく、時点は到達時をあらわし、「戻る」は着点が一時的な起点を含む起点でなければならない、時点は到達時をあらわすという記述で必要十分である。しかし、「帰る」「行く」に関しては時点の解釈についてもう少し詳しく考察しなければならないし、また、「来る」「行く」に関しては話し手の関与性をさらに詳しく考察していかなければならない。

2 「帰る」の特徴

次の例はたとえば「太郎は6時にオフィスを出ていった」という解釈と「太郎は6時に家に着いた」という解釈ができる曖昧性がある。

- (13) 太郎は6時に帰ったよ。

状況 (S) は事態 (の集まり) によって成り立ち、事態 (σ) は関係 (属性) (R) や固体など (a) がその構成要素となっている。それをそれぞれ(14)(15)のように表示することにする。(3)

- (14) $S \models \sigma$

- (15) $\sigma = \langle R, a; 1 \rangle$ ないし $\sigma = \langle R, a; 0 \rangle$

ただし、1, 0 で示した値は極性をあらわす。

「移動」というものは起点に存在していた移動体が着点に存在するようになることなので、「移動」とは移動前の状況に存在していた移動体が移動後の状況に存在するようになることであると言い換えることができる。移動前の状況 (PreM) ・移動後の状況 (PostM) は “present” (存在する) という関係 (属性)、場所のパラメータ (l) (4)、移動体のパラメータ (p)、時間のパラメータ (t) を用いて記述することができる。

- (16) $\text{PreM} \models \langle \text{present}, l_1, p, t_1; 1 \rangle$

- $\text{PostM} \models \langle \text{present}, l_2, p, t_2; 1 \rangle$

ただし、 l_1 は起点、 l_2 は着点をあらわす。

そうすると、(13)があらわす起点と着点の状況は(16)のそれぞれのパラメータの値を設定することによって次のように記述することができる。ここで(13)は太郎が帰途にある場合でも用いられるので、(13)'の着点での移動後の状況が成立するための事態は正しくないと思われがちだが、これは現実

世界の状況・事態をそのまま示したものではなく、(13)を発話する話し手が頭に描いた状況・事態を示している。

(13′ 起点の PreM = 《present, office, taro, t_1 ; 1》

起点の PostM = 《present, office, taro, t_2 ; 0》

着点の PreM = 《present, taro's home, taro, t_1 ; 0》

着点の PostM = 《present, taro's home, taro, t_3 ; 1》

この記述から(13)が前者の解釈になるのは起点の PreM から起点の PostM への変化が起こるときであり、後者の解釈になるのは着点の PreM から PostM への変化が起こるときである（時点の解釈はそれぞれ t_2 , t_3 ）と推測できるが、これでは曖昧性を解釈論的に説明したにすぎない。なぜならば、この記述では「帰る」が移動の前か後かどちらか寄りの動詞かという後よりの動詞であるという我々の言語直観を説明するところが難しいからである。

そこで、このように起点と着点のそれぞれの移動前後の状況を記述するのではなく、場所の軸をはずして、移動前後の状況を記述すると(13″)のようになる。

(13″ PreM = 《present, office, taro, t_1 ; 1》 (起点)

PreM = 《present, taro's home, taro, t_1 ; 0》 (着点)

PostM = 《present, office, taro, t_2 ; 0》 (起点)

PostM = 《present, taro's home, taro, t_3 ; 1》 (着点)

そうすると、時点の解釈は(13′)の場合と同様にとることができる上に「帰る」が移動の後よりの動詞であることを直接的に説明することができるようになる。移動後の状況に注目すると、時点の解釈に必要な t_2 , t_3 をもつ事態が移動後の状況に一極的に成立しているからである。即ち、「帰る」は着点が移動主体の本拠地である上に、時点が移動後の状況が成立する時をあらわす移動動詞であると言える。そして移動後の状況には起点からいなくなるという事態と着点に現れるという事態のマイナスとプラスの極性をもつ二つの事態があらわされている。

そう考えると、前節で特徴化できた「着く」「出発する」「戻る」には「帰る」が持つようなマイナスの極性を語彙的な意味に持たないことから、「帰る」は移動後の状況に特徴的な特殊な移動動詞であるという位置づけができる。

3 周辺状況

前節では現実世界での状況を観察するより移動の前の状況と後の状況を観察する方が有効であることをみた。これは発話が現実世界で生起する事柄を描写するのに発話世界というものを独自に持っていて、発話世界の事柄を現実世界に投射することによって、さきほどの(13″)から(13′)の解釈ができるということである。言語にとっては発話世界が一次的なものであり、人間は解釈するときに現実世界と照らし合うということができる。(5)

次に「帰る」に「てくる」がついた形「帰ってくる」を考える。(6)

(17) 太郎は6時に帰ってきた。

(17)は(13)では可能だった「太郎は6時にオフィスを出ていった」という解釈ができなくなり、「太郎は6時に家に着いた」という解釈しかできなくなる。さらに、(13)の話し手はオフィスにいても太郎の家にいてもその他の場所にいてもよかったが、(17)の話し手は発話時あるいは出来事時に太郎の家にいなければならない。(7)

このような時点解釈から、「帰ってくる」は「帰る」の特殊性の要因であったマイナスの極性を持つ事態を移動後の状況に持たないと言することができる。この現象は「帰る」が特殊な移動動詞であったのが複合動詞になって「着く」「出発する」「戻る」などのような一般の移動動詞の特徴に近づいただけであって、特別なことではない。

また、話し手の存在に関しては、直接的に移動とは関係しないものであるので、移動前後の状況には属さない。話し手が関与するのは移動後の周辺状況 (PostCirc) である。(8) そう考えると(17)は次のように記述できる。ただし移動後の周辺状況が成立する事態の時間 t の取り扱いについては詳しくは第4節で述べるので、ここでは t が発話時あるいは出来事 t_2 であるとしておく。

(17)' PreM = 《present, office, taro, t_1 ; 1》

PostM = 《present, taro's home, taro, t_2 ; 1》

PostCirc = 《present, taro's home, speaker, t ; 1》

このPostCircの記述によって「帰る」と「帰ってくる」の違いが記述できるようになる。「来る」「行く」に関しては、この移動後の周辺状況が大に関わってくるので、次節で詳しく観察することにする。

また、周辺状況には移動後の周辺状況の他に移動前の周辺状況 (Circ) が考えられるが、「帰ってくる」の意味記述には関係しないのでそれは記述していない。

4 「来る」「行く」

「来る」「行く」の使用制約を考えると、移動主体と着点を考察するのが一般的である。移動主体に関しては、久野 (1978) は移動主体が話し手である場合と話し手以外の場合に分ける。着点に関しては、大江 (1975) は発話時あるいは出来事時に話し手が着点にいるとき「来る」が選ばれ、そうでないとき「行く」が選ばれると説明する。久野 (1978) も同様に着点の話し手の関与性に注目し、発話時あるいは出来事時に話し手が視点を接近させる人がいるとき「来る」が選ばれ、そうでないとき「行く」が選ばれると説明する。後者は前者で説明できなかったような次の例の解釈を説明するのに有効である。

- (18) a. 太郎が花子に会いに来た。
 b. 太郎は花子に会いに行った。

前者は(18a)についてたとえば花子の家に発話時に話し手がいる解釈、太郎が来たときその場に話し手がいた解釈を説明できる。

後者はさらに話し手が発話時あるいは出来事時にその場所にいなくても話し手が花子よりの視点をとっているときが(18a)で、中立の視点をとっているときが(18b)であるという我々の言語直観に合う解釈も説明できる。しかし、移動主体が第三者であり着点が聞き手の場所である場合は第三者と聞き手のどちらの視点をとっていいのか難しくなる。(9)

次の例は話し手が太郎と一緒にいるのでもなく、聞き手と一緒にいるのでもないとき発話されたときの現象である。(もし話し手が太郎と一緒にいたら「行く」が用いられ、もし話し手が聞き手と一緒にいたら「来る」が用いられるのは自明である。)

(19) 太郎は君の家に2時に {*来るために／行くために}、タクシーを拾いました。

(20) 太郎はタクシーに乗って、君の家に2時に {来ます／行きます}。

移動主体が第三者で、着点が聞き手の家であることはともに一致しており、話し手の視点の違いが見られないはずである。それなら同じ文法性判断が下されなければならないが、事実はそのようではない。

そこで、移動主体は話し手とそれ以外に分けるのではなく、話し手・聞き手・話し手と聞き手の両者・第三者に分け、着点も話し手の関与性がある場合とそうでない場合に分けるのではなく、話し手地点・聞き手地点・第三者地点に分けて考察していくことにする。

4. 1 話し手の移動

話し手の移動に関しては久野(1978)は、発話場所が到達点であれば「来る」を用い、出発点であれば「行く」を用いると指摘している。

<話し手地点への移動>

話し手の話し手地点への移動はある場所から現在いる地点に移動するときのみ可能であり、(21)のように「来る」を用いる。しかし、その場所を一旦離れてしまうと(21)'のように「来る」が使えなくなり、「行く」しか使えなくなる。

(21) こんな遠くまで {来てしまった／*行ってしまった}。

(21)' 昨日はあんなところまで {*来てしまったんだなあ／行ってしまったんだなあ}。

それは「来る」を使うときは、発話時に話し手が着点にいることが必要とされるということと移動主体としての話し手と移動後の状況に存在する話し手とを区別しなければならないということを示している。即ち、「帰ってくる」の意味記述をするのに必要とした移動前後の状況とその周辺

状況を記述しなければならないということである。(21)のように移動主体が話し手で、着点が話し手のいる場所であるときの状況は次のように記述することができる。

(21)^r PreM ⊢ 《present, l, speaker, t₁; 1》

PostM ⊢ 《present, here, speaker, t₂; 1》

PostCirc ⊢ 《present, here, speaker, speech time; 1》 (⇒クル)

ただし、t₁ < t₂ ≤ speech time

これから、移動後の周辺状況に事態《present, l₂, speaker, speech time; 1》が成立するときは「来る」で、その事態が成立しないときは「行く」であることが言える。

<聞き手地点への移動>

話し手の聞き手地点への移動は発話時ないし出来事時に聞き手がいるところへの移動であったり、聞き手の属する場所への移動であったりする。しかしこの両者には違いが見られない。次の例の「君の家」に聞き手がいてもいなくても文法性判断は左右されない。

(22) 今から君の家に遊びに {*来るよ/行くよ}。

(22)^r 一時間前に君の家に遊びに {来たんだよ/行ったんだよ}。

文法性判断に関わるのは、話し手地点への移動と同様に発話時に話し手が着点にいるかどうかである。いない場合は(22)のように「行く」しか使えない。(22)^rで「来る」が使えるのは話し手が聞き手の家にいるときで、「行く」が使えるのは話し手が聞き手の家を後にしてからである。

(22)^r PreM ⊢ 《present, l, speaker, t₁; 1》

PostM ⊢ 《present, hearer's home, speaker, t₂; 1》

PostCirc ⊢ 《present, hearer's home, speaker, speech time; 1》 (⇒クル)

ただし、t₁ < t₂ ≤ speech time

(22)^rは「来る」が使われるときの状況で記述で、移動後の周辺状況に事態《present, hearer's home, speaker, speech time; 1》が成立しないとき「行く」が使われる。

<第三者地点への移動>

話し手の第三者地点への移動は次のようなもので、話し手地点への移動や聞き手地点への移動のように基本的には発話時に話し手がいる地点への移動には「来る」が用いられ、いない場合には「行く」が用いられる。

(23) 僕は明日東京に {*来ます/行きます}。

(23)^r 僕は昨日東京に {来ました/行きました}。

(23)は発話時に東京にいることが不可能なので「行く」しか使えず、(23)^rは発話時に東京にいるとき「来る」で、東京から帰ってきていたら「行く」である。したがって(23)(23)^rの文法性の判断は(21)^r(22)^rの場合と同じように次のような状況の記述で説明することができる。

- (23) PreM ⊨ 《present, I, speaker, t_1 ; 1》
 PostM ⊨ 《present, tokyo, speaker, t_2 ; 1》
 PostCirc ⊨ 《present, tokyo, speaker, speech time; 1》 (⇒クル)
 ただし、 $t_1 < t_2 \leq \text{speech time}$

ここまでは話し手の移動に関しては、発話時に話し手が着点にいることが必須条件であるが、次のような例も不自然ではない。第一文の着点「福岡」は第二文の着点である「長崎」への中途地点であるが、その場合、話し手は発話時に「福岡」にはいなくて「長崎」にいる。

- (24) 昨日は新幹線で福岡まで {来ました/*行きました}。天神で一泊して今長崎に来ています。

ということは、発話時に話し手が着点にいるということは必ずしも必須条件なのではなく、話し手の移動に関しては発話時に移動の目的地に話し手がいればよくて、今まで見てきた例は移動の目的地と移動の着点が等しかったと言うほうが公正であろう。(24)は次のように状況の記述ができ、福岡を着点とする移動後の周辺状況が成り立つための事態は発話時のものでなくてもよいが、長崎が着点=目的地とする移動後の状況が成り立つための事態は発話時のものでなければならない。

- (24) PreM₁ ⊨ 《present, I, speaker, t_1 ; 1》
 PostM₁ ⊨ 《present, fukuoka, speaker, t_2 ; 1》
 PostCirc₁ ⊨ 《present, fukuoka, speaker, t_3 ; 1》 (⇒クル)
 PreM₂ ⊨ 《present, fukuoka, speaker, t_4 ; 1》
 PostM₂ ⊨ 《present, nagasaki, speaker, t_5 ; 1》
 PostCirc₂ ⊨ 《present, nagasaki, speaker, speech time; 1》 (⇒クル)
 ただし、 $t_1 < t_2 \leq t_3 < t_4 < t_5 \leq \text{speech time}$

4. 2 聞き手の移動

話し手の移動は発話時に話し手が着点 (=目的地; 以下「着点」で「目的地」を指す。) にいるかどうかに関わってきたが、移動主体が聞き手である場合は、聞き手に関わる事態は移動前後の状況に記述され、話し手に関わる事態は周辺状況に記述されるので、移動前後の状況とその周辺状況は独立したものであるとすることができる。

<話し手地点への移動>

- (25) 僕の家遊びに {来ないか/*行かないか}。(10)

この例は発話時に話し手が自分の家にもいなくても「来る」しか使えない。前者は話し手の移動で見たように、a) 移動後の周辺状況が成立するための事態は発話時であるときで、後者には次の二つの可能性がある。一つは、b) 聞き手の移動が起こるときには話し手が家に帰って

いるような場合で、もう一つは、c) 聞き手の移動が起こるとき話し手がまだ帰っていないような場合である。つまり、(b) は聞き手の移動の出来事時が話し手の在宅時間に含まれる場合である。⁽¹¹⁾ そうすると、(c) は聞き手の移動の出来事時が話し手の在宅時間に含まれないということになる。しかし、着点が話し手の家 (=本拠地) であるので、それは話し手が普段いる場所という属性を持っている。以上のことから(25)のあらかず移動後の周辺状況はそれぞれ(26a)(26b)(26c)の三つの可能性があると言うことができる。

(26) PreM ⊨ 《present, l, hearer, t_1 ; 1》

PostM ⊨ 《present, speaker's home, hearer, t_2 ; 1》

a. PostCirc ⊨ 《present, speaker's home, speaker, speech time; 1》 (⇒クル)

b. PostCirc ⊨ 《present, speaker's home, speaker, t_3 ; 1》ただし、 $t_1 < t_2 < t_3$

(⇒クル)

c. PostCirc ⊨ 《present, speaker's home, speaker, general time; 1》 (⇒クル)

移動後の周辺状況が(26c)のとき、聞き手の移動の時点 t_2 と general time は $t_2 < \text{general time}$ という関係なので、(26b)と同様に「来る」が使われる。

次の例では(26a)(26b)のような条件により発話時ないし出来事時に話し手が家にいる場合は必ず「来る」が使われ、そうでない場合は「行く」が使われるが、両者は(26c)のような状況を兼ね備えている。ということは、(26a)(26b)は(26c)よりも優性であると言える。

(27) a. 今すぐ僕の家に来なさい／行きなさい。

b. 僕の家に来るに3時に来て下さい／行って下さい。

さらに、着点が仮の本拠地の場合がある。次の例では話し手が発話時に着点にいるときは両方とも「来る」しか使えないが(出来事時の解釈は文脈からとれない)、そうでないとき、たとえば外出中に電話で話をしている場面を想定すると、(28)のように着点が正真正銘の本拠地のときは「来る」しか使えないが、(28)'のように仮の本拠地のときは「来る」「行く」が使えるようになる。

(28) 僕はちょっと帰るのが遅くなるんだけど、僕がいなくても家に {来なさいよ/*行きなさいよ}。

(28)' 僕はちょっと戻るのが遅くなるんだけど、僕がいなくても僕のオフィスに {来なさいよ／行きなさいよ}。

ということは、「オフィス」のような仮の本拠地は(26c)のような事態を持っていると考えることもできるし、持っていないと考えることができるということである。

<聞き手地点への移動>

聞き手の聞き手地点への移動は発話時にいる場所への移動が不可能なので、発話時に聞き手が家などにいない場面を想定しなければならない。そうすると、次の例のように「来る」「行く」が使いにくくなる。着点が聞き手の家なので普通は「帰る」を用い、話し手が発話時ないし出来

事時に聞き手の家にいるときは「帰ってくる」を用いる。後者は第2節で見たように移動後の周辺状況に発話時ないし出来事時に話し手の存在があるからである。

(29) 君の家に {*来て/??行って/帰って/帰ってきて}、奥さんを手伝ってあげなさい。
ここでなぜ「来る」「行く」が使えないかということを考える必要がある。「来る」が使えない訳は発話時にも出来事時にも話し手が聞き手の家にはいないということと、聞き手の家は話し手の本拠地ではないということから説明できる。そうになると「行く」が用いられてもいいようであるが実際はそうではない。それは次のような(29)の状況の記述を観察すれば納得がいく。

- (29) PreM = $\langle\langle$ present, l, hearer, t_1 ; 1 $\rangle\rangle$
 PreM = $\langle\langle$ present, hearer's home, hearer, t_2 ; 1 $\rangle\rangle$
 PostCirc = $\langle\langle$ present, hearer's home, hearer, general time; 1 $\rangle\rangle$
 ただし、 $t_1 < t_2 \subset$ general time

着点が聞き手の家なので移動後の周辺状況には事態 $\langle\langle$ present, hearer's home, hearer, general time; 1 $\rangle\rangle$ が成立している。そうになると $t_2 \subset$ general timeであるので聞き手の移動自体が成立しなくなり、「行く」が使いにくくなると言うことができる。

<第三者地点への移動>

聞き手の第三者地点への移動はその第三者地点に話し手がいるかいないかによって文法的な振る舞いに違いが生じる。

- (30) a. 君は昨日の太郎家のパーティに {*来ましたね/行きましたね}。それでどうでしたか?
 b. 明日太郎家のパーティに行くんだけど、君も {来ないか/行かないか}。

(30a)に関しては、出来事時に話し手がパーティにいないので(31b)が不成立で「来る」が使えない。(もし太郎の家が話し手の本拠地であったり話し手が発話時に太郎の家にいたりすれば、それぞれ(31c)(31a)が成立し「来る」が使えるようになる。)(30b)の聞き手の移動に関しては、話し手の移動が「行く」によってあらわされているので、(31a)(31b)(31c)の可能性はないと考えられる。それで聞き手の移動も「行く」が使われる。

- (31) PreM = $\langle\langle$ present, l, hearer, t_1 ; 1 $\rangle\rangle$
 PostM = $\langle\langle$ present, taro's home, hearer, t_2 ; 1 $\rangle\rangle$
 a. PostCirc = $\langle\langle$ present, taro's home, speaker, speech time; 1 $\rangle\rangle$ (⇒クル)
 b. PostCirc = $\langle\langle$ present, taro's home, speaker, t_3 ; 1 $\rangle\rangle$
 ただし、 $t_1 < t_2 \subset t_3$ (⇒クル)
 c. PostCirc = $\langle\langle$ present, taro's home, speaker, general time; 1 $\rangle\rangle$ (⇒クル)

しかし、(30b)では「来る」も使える。それは話し手の移動による移動後の状況がそのまま聞き手の移動の移動後の周辺状況になる解釈をするときである。(30)は話し手の移動前後の状況をあら

わたしたちのものであるが、そのPostMが(31b)のPostCircに引き継がれたので「来る」が使うことができるようになるのである。

(32) PreM ⊨ ⟨present, I, speaker, t_1 ; 1⟩

PostM ⊨ ⟨present, taro's home, speaker, t_5 ; 1⟩ ただし、 $t_1 < t_5$

4. 3 話し手・聞き手両者の移動

<話し手地点・聞き手地点への移動>

話し手と聞き手の両者の移動で話し手地点への移動ないし聞き手地点への移動は、理論上、たとえば発話時ないし出来事時に話し手がない自分の家や聞き手がない自分の家が着点となる。(26ab)(31ab)のような可能性はない。)しかし、現象を見てみると「来る」「行く」は自由に使うことは難しいようである。「帰る」は話し手と聞き手が同じ家に住んでいる場合は可能となるが、その場合は普通着点は「僕たちの家」になるはずである。

(33) a. 僕の家と一緒に {*来ようぜ/(?)行こうぜ/?帰ろうぜ}。

b. 昨日僕たちは一緒に僕の家 {*来た/(?)行った/?帰った}。

(34) a. 今から君の家と一緒に {*来ようぜ/(?)行こうぜ/?帰ろうぜ}。

b. 昨日僕たちは一緒に君の家 {*来た/(?)行った/?帰った}。

まず、なぜ(33)で「来る」が使いにくくなるかは(29)の場合と同じようにこれらの移動動詞の意味を無理強いすると移動の成立が不可能になるからである。この状況はそれぞれ(33)'のように記述できる。

(33)' PreM ⊨ ⟨present, I, speaker and hearer, t_1 ; 1⟩

PostM ⊨ ⟨present, speaker's home, speaker and hearer, t_2 ; 1⟩

PostCirc ⊨ ⟨present, speaker's home, speaker, general time; 1⟩

ただし、 $t_1 < t_2 < \text{general time}$

(33)'の話し手に関わる事態は $t_2 < \text{general time}$ の関係で、話し手の移動の成立が不可能になるからだと言える。また、「行く」が使いにくくなる訳は着点が話し手の家であるから非明示的に事態⟨present, speaker's home, speaker, general time; 1⟩が示されるからである。

次に、(34)で「来る」が使えないのは次の状況の記述を観察すると分かるように、移動後の周辺状況に話し手の関与がないからで、「行く」が使いにくいのは(33)と同じように非明示的にしか事態⟨present, hearer's home, hearer, general time; 1⟩が示されないからであると言える。(33)(34)の文法性の判断でインフォーマントに「行く」の使用を許可する者もいたが、その場合、「行く」の使用には移動後の周辺状況になにも有意義な事態を必要としないからで、「行く」が使えると言っても問題はない。)

- (34) PreM ⊢ ≪present, I, speaker and hearer, t_1 ; 1≫
 PostM ⊢ ≪present, hearer's home, speaker and hearer, t_2 ; 1≫
 PostCirc ⊢ ≪present, hearer's home, hearer, general time; 1≫
 ただし、 $t_1 < t_2 \subset$ general time

<第三者地点への移動>

話し手・聞き手の両者の第三者地点の移動は常に着点で中立的である。従って、移動後の周辺状況に話し手はいっさい関与できないので、次のように「行く」しか使うことができない。

- (35) 一緒に映画でも見に {*来ようぜ／行こうぜ}。

4. 4 第三者の移動

久野 (1978) は、聞き手の移動もそうなのだが、第三者の移動は発話時あるいは出来事時に着点に話し手の視点をとることができる人がいれば「来る」で、そうでなければ「行く」が使われると説明する。しかし、第三者の聞き手地点への移動には他の要因が絡んでくる。

<話し手地点への移動>

第三者の話し手地点への移動は発話時ないし出来事時に話し手がいるところ、または話し手の本拠地が着点になる。

- (36) 太郎は僕の家に来ます {来ます/*行きます}。

この例は話し手が自分の家に発話時にいるときでも、太郎が来るときに話し手が家にいるときでもそうでないときでも「来る」しか使えない。それは(26abc)(31abc)と同様の移動後の周辺状況が可能であるからである。

<聞き手地点への移動>

第三者の聞き手地点への移動は、発話時ないし出来事時に聞き手の家などに話し手がいるときは「来る」しか使えない。それは(26ab)(31ab)と同様の移動後の周辺状況が成立するからである。しかし、そうでない場合は複雑な現象を呈する。そういう設定のもとで次の例を見ると、(37a)は「来る」が使いにくいのに対し、(37b)は「来る」「行く」の両方が使える。

- (37) a. 君の家に太郎が {??来ましたよ／行きましたよ}。
 b. 君の家に太郎が {来ますよ／行きますよ}。

着点に話し手の関与がないという設定なので(37a)で「来る」が使いにくいのは問題がないが、(37b)では「来る」が不自然ではない。これを説明する方法の一つは、話し手の聞き手への「主体移行」という概念を使うことである。⁽¹²⁾この場合「主体移行」というのは話し手が聞き手の

視点を持つこと、話し手が聞き手に同化することである。

この概念を用いて(37a)のような過去の事態では「来る」が使いにくい、(37b)のような非過去の事態では「来る」が使えるようになることを説明する。過去の事態の場合、話し手が聞き手に主体移行すると、「君の家へ太郎が来た」ことを知っていなければならなくなり、実際は話し手が知っているのは「君の家へ太郎が行った」ことだけなので主体移行ができないということになる。それに対して、非過去の事態の場合は、事態は未成立なので主体移行がかなり自由に行えるようになる。

しかしながら、非過去の事態でありながら、自由に主体移行ができない場合がある。

- (38) a. 太郎が君の家に {??来るから/行くから}、よろしくね。
 b. 太郎が君の家に {来たら/??行ったら}、このこと伝えてね。

発話時ないし出来事時に話し手が聞き手の家にはいないという設定のとき、移動主体が同一で着点と同じであるにもかかわらず上のように文法性に違いが見られる。これを説明するためにはもう一度原点に立ち戻って、状況の記述を試みなければならない。(38a)の主節と(38b)の主節の間には次のような違いが見られる。

- (39) PerM = $\langle \text{present, } l, \text{ taro, } t_1 ; 1 \rangle$
 postM = $\langle \text{present, taro's home, taro, } t_2 ; 1 \rangle$
 a. Circ = $\langle \text{ask-hearer, speaker, speech time ; } 1 \rangle$
 b. PostCirc = $\langle \text{tell-taro, hearer, } t_3 ; 1 \rangle$ ただし、 $t_1 < t_2 < t_3$

(38a)の主節の事態は、(39a)のように話し手の聞き手への依頼があらわされているので移動前の周辺状況に成立するべき事態でしかないのに対して、(38b)の主節の事態は(39b)(39a)のように移動後の周辺状況で行われる事態と聞き手への依頼があらわされている。ということは、(39b)のように主節のあらわす事態が移動後の周辺状況で成立する場合にのみ「来る」が用いられるとすることができる。

さらに、前の例と同じように、発話時ないし出来事時に話し手が聞き手の家にはいないという設定のとき、移動主体が同一で着点と同じであるにもかかわらず、次のように文法性に違いが見られる。(40a)も非過去の事態でありながら、自由に主体移行ができない。(40b)の主節の「来る」が主体移行によって説明できるとすると、(40a)で「来る」が使えない理由のヒントは従属節に潜んでいることが分かる。(38a)(38b)も従属節内の「来る」「行く」であった。

- (40) a. 太郎は君の家に2時に {*来るために/行くために}、タクシーを拾ったよ。
 b. 太郎はタクシーに乗って、君の家に2時に {来るよ/行くよ}。

(40a)の主節の事態は移動前の周辺事情に成立するべき事態であるので、(39a)と同様に移動前の周辺事情は次のように記述できるが、移動後の周辺状況が成立するための事態では有意義なものはないも見当たらない。その結果「来る」が使えないということになる。

- (40)' Circ = $\langle \text{take-taxi, taro, } t_0 ; 1 \rangle$ ただし、 $t_0 \leq t_1$

＜第三者地点への移動＞

第三者の第三者地点への移動はその着点に話し手が発話時ないし出来事時にいたり、またその着点が話し手に属する地点であれば「来る」が使われ、そうでないとき「行く」が使われる。次の例では話し手がパーティにまだ残っていたり、太郎が来たときに話し手がパーティに参加していたり、また話し手主催のパーティであれば「来る」が使われる。

(41) 太郎はパーティに {来た／行った}。

即ち、移動後の周辺状況が(26abc)(31abc)と同様であれば「来る」で、そのどの事態も可能でなければ「行く」である。先の(18)も同様に説明できる。

4.5 質問文

質問文については、大江(1975)が文が過去事態をあらわすか非過去事態をあらわすかによって「来る」「行く」の文法的な振る舞いに違いがあることを指摘し、井島(1993)がそれに対して興味深い分析をした。次に見るように過去事態の場合「来る」「行く」の両方が使えるが、非過去事態の場合「行く」が使いにくくなる。

(42) a. 昨日君の家に太郎が {来ましたか／行きましたか} ?

b. 明日君の家に太郎が {来ますか／??行きますか} ?

井島(1993:13)の説明をここに引用する。

すなわち、疑問文の表わす事態は聞き手の知識に属すると想定される事態であるので、聞き手の視点を取り得ることは時間に関わりなく一貫しているが、話し手の視点を取り得るのは客観的な事実であるために話し手も関与できる過去事態の場合である。

しかし、(37)のような叙述文では文法性の振る舞いが異なっていた。聞き手の家などに話し手が発話時ないし出来事時に話し手がないという設定では、文が過去事態をあらわすときは「来る」が使いにくくなり、非過去事態をあらわすときは「来る」「行く」の両方が使えた。ここに(37)を再掲する。

(37) a. 君の家に太郎が {??来ましたよ／行きましたよ}。

b. 君の家に太郎が {来ますよ／行きますよ}。

そして(37a)で「来る」が使えないのは話し手が知っていることが「君の家に太郎が出かけた」こと、即ち移動前の状況だけであって、「君の家に太郎が着いた」かどうか、即ち移動後の状況を話し手が知るすべを持たないという理由で、話し手の聞き手への主体移行が不可能だったのである。

質問文の性格を考えると次のように説明できる。まず、当然のことながら、聞き手地点への移動についての質問文は聞き手が移動後の状況を認識できるという想定の下に可能である。また、質問文では井島(1993)が言うように話し手の聞き手への主体移行が可能であるとする。そうす

ると、「来る」は移動後の状況に聞き手(=主体移行した話し手)の存在が必要とされるので、移動後の状況を認識できる状態にあるという条件をクリアし問題がない。過去事態における「行く」は移動後の周辺状況が成立していることを前提とするので聞き手に質問できる条件が整っている。しかしながら、未来事態における「行く」は移動後の状況がまだ未成立であるため質問の条件に満たない。そのために(42b)では「行く」が使えないとすることができる。

そう考えると、話し手の聞き手への主体移行が可能なのは、聞き手が認識する移動後の状況を話し手も認識できるときであるということと、質問文が成立する条件は聞き手が移動後の状況を認識できると話し手が想定していることを区別して考えなければならない。(37)は主体移行が関わってきているだけだが、(42)は主体移行と質問文の条件が関わっているのである。

4. 6 特 徴

ここまで議論してきたことから「来る」「行く」の特徴をまとめるとこうなる。

まず最初に「来る」は、移動後の周辺状況が次のような条件で焦点化されているとき用いられる。

- (43) a. 移動後の周辺状況に発話時に話し手の存在がある。

PostCirc = $\langle\langle$ present, l, speaker, speech time; 1 $\rangle\rangle$

- b. 移動後の周辺状況に出来事時 (t_1) に話し手の存在がある。

PostCirc = $\langle\langle$ present, l, speaker, t_2 ; 1 $\rangle\rangle$ ただし、 $t_1 \subset t_2$

- c. 着点が話し手の本拠地である。

PostCirc = $\langle\langle$ present, l, speaker, speech time; 1 $\rangle\rangle$

- d. 従属節の事態が第三者の聞き手地点への移動の時、主節の事態が移動後の周辺状況に成立する。

- e. 主節の事態が第三者の聞き手地点への移動の時、話し手の聞き手への主体移行が起こる。

移動後の周辺状況は、話し手の移動の場合は(43a)が唯一成立し、聞き手の移動の場合は(43a)(43b)(43c)が絡んでくる。また第三者の移動の場合は、(43a)(43b)(43c)(43d)(43e)が関わってくる。もう少し詳しく述べると(43a)(43b)(43c)が関わってこないとき(43d)(43e)が関わってくる。そして、これらの条件にはプライオリティがあり、(43a) > (43b) > (43c) > (43d) > (43e)の関係になっている。

そして「行く」は移動後の周辺状況が焦点化されていないとき用いられ、それは「来る」のような条件付きではない。ただ「来る」が用いられる条件が成立しないときに「行く」が用いられるのである。

次に、時点解釈について考えてみる。「来る」を用いるためには移動後の周辺状況が焦点化されていないとなければならないということから、「来る」を使うときは時間副詞句は到達時をあらわす

ことができることは簡単に説明される。そして、「行く」を用いるためには移動後の周辺状況が焦点化されていなければよいということは、基本的には「行く」を使って出発時も到達時もあらわすことができるということである。しかし、移動後の周辺状況が焦点化されてしまえば「行く」が使えなくなるので、出発時をあらわす方が到達時をあらわすよりも得意であると言うことができる。これは、「行く」がどちらかという移動の前よりの移動動詞であるという我々の言語直観を説明している。

5 ま と め

本稿では着点をあらわすことができる移動動詞について議論した。その中で、起点をあらわせない「着く」のような移動動詞は着点に関しては中立的であるのに対して、起点・着点の両方をあらわすことができる移動動詞はすべて着点にはなんらかの制約があることが分かった。そして、その制約にはいくつかの段階があった。「出発する」「戻る」のような移動動詞は着点の属性に特徴があり、「帰る」のような移動動詞は移動後の状況の特徴があった。そして「来る」には移動後の周辺事情に特徴があり、その特徴がないときに初めて「行く」が現れるという「来る」と「行く」の関係も見た。

そして、これらの議論を通して、現実世界の状況をそのまま記述するよりも発話世界を記述する方が直接的な説明が可能であることや、移動動詞の場合は移動前後の状況と移動前後の周辺事情を記述することによって顕微鏡的に様々な差異が見てとれることが明らかになった。

註

- 「出る」「発つ」「降りる」などの離脱をあらわす動詞は、着点に注目しないときは起点のみに着目し、格助詞「を」で出どころ・起点をあらわすのが、次のように着点にも注目するときは次のように格助詞「から」で起点を、格助詞「に」で着点をあらわす(益岡・田窪1987: 60-61)が、「去る」には後者の用法がない。
 - 部屋の中から外に出た。
 - 福岡からホノルルに発った。
 - 二階からリビング・ルームに降りた。
- 「出発する」にはこの制約以外にも小規模な移動をあらわす場合は使えないという制約もありそうだが、本稿ではこれ以上深く考えない。
- この考え方は Barwise and Perry (1983) で提唱された「状況意味論」の考え方で、白井(1991)第5章で詳しく解説されている。
- 本来は場所のパラメータと時間のパラメータを統合して時空間のパラメータを設定すべきかもしれないが、本稿の議論の都合により分ち書きした。
- 井島(1993)も用語が異なるが、同様のことを考えている。彼のいう表現世界は本稿でいう現実世界、話題世界は発話世界に対応する。
- 「～てくる」の諸現象に関しては坂原(1994-1995)を参照されたい。
- 質問文にして「太郎は帰ってきましたか」の形にすると話し手は太郎の家になくてもよくなるが、それは質問文の特質が関わってきているからである。質問文については後の第4.5節で詳しく述べる。

- 8 日本語を諸現象について意味論的に考察したものに土屋ほか(1990)があり、そこでは日本語の意味記述には以下の6つの要素が必要であることが述べられているが、本稿では議論を明確にするために、移動動詞の議論に重要なものだけを扱っているのであって、決して移動動詞の意味に他の要素が必要ではないということではない。また本稿のPreMはPreD, PostMはPostDに対応する。
- (a) 表現の発話に関する事前領域 (PreD)
 - (b) 表現の発話に関する事後領域 (PostD)
 - (c) 表現の発話の周辺事情 (Circ)
 - (d) 表現の発話の内容 (Cont)
 - (e) 表現の発話の事前内容 (PreCont)
 - (f) 表現の発話の周辺事情 (PostCirc)
- 9 久野(1978)は話し手が着点側の人の視点をとるか移動主体の視点をとるかを決めるとき、次のような発話当事者のハイアラキーなどの談話法上の規則に従うという。これを見ると二人称と三人称の間にはハイアラキーをつけるのが困難であることがうかがえる。Eは共感度を示し、1は話し手の完全な同一視化を示す。
- <発話当事者のハイアラキー>
- 話し手は、常に自分の視点をとらなければならない、自分より他人寄りの視点をとることができない。
- 1 = E (一人称) > E (二・三人称)
- 10 この例は「僕の家と一緒に遊びに行かないか」の解釈をすれば、かなり文法性があがるが、そうなる聞き手の移動ではなく、話し手と聞き手の両者の移動になる。これについては次の第4. 3節で取り扱う。
- 11 (26b)の条件が $t_2 C t_3$ であることは次の例で説明できる。この文の話し手は発話時には家にはいないので(26a)の条件は成立しない。文脈からは、聞き手が話し手の家に着く時間には話し手はまだ家に帰っていないということが分かるので、この例で「来る」が使えないのは、出来事時 C 話し手の在宅時間が成り立たないからだと言える。
- 今からすぐ家に帰るから、さきに(家に) {*来て/行って} 待っていてください。
- さらに、(26c)の条件により「来る」が使われてもよさそうであるが、実際は使えない。ということから、(26b)の条件の方が(26c)よりも優性であると言える。
- また、(28)とも比較されたい。(28)は話し手の帰宅ないし在宅は明示的にあらわされていない。そういうときは(26b)の条件を採択できなくなり、(26c)の条件で「来る」が用いられる。
- 12 井島(1993)では疑問文、思考・伝達動詞の補文における現象をこの概念を使って説明している。彼の質問文に対する考え方は第4. 5節でふれる。

<参考文献>

- Barwise, Jon and John Petty (1983) : *Situations and Attitudes*, Bradford Books, MIT Press, Cambridge, Mass.
土屋俊ほか(訳)『状況と態度』(産業図書), 1992.
- Barwise, Jon (1989) : *The Situation in Logic*, CSLI Lecture Notes 17, Stanford University.
- 井島正博(1993) : 「視点の表現機構」, 『成蹊大学文学部紀要』第28号.
- 久野 暉(1978) : 『談話の文法』(大修館書店).
- 益岡隆志・田窪行則(1987) : 『格助詞(日本語文法セルフ・マスターシリーズ3)』(くろしお出版).
- 大江三郎(1975) : 『日英語の比較研究』(南雲堂).
- 坂原茂(1994-1995) : 「複合動詞『Vて来る』」, 『言語・情報・テキスト』Vol.2
(東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻).
- 白井賢一郎(1991) : 『自然言語の意味論』(産業図書).
- 土屋俊ほか(1990) : 「日本語の意味論をもとめて」, 『月刊言語』第19巻第1~12号(大修館).

(1995. 9. 12 受理)